

「生き方」を教えるといふこと

タレント ダニエル・カール

僕は教師という職業に大きな尊敬の念を抱いています。先生たちは、子供たちに授業を通して様々な教育をするだけでなく、人として「どう生きるか」ということを教えることを求められます。もちろん「生き方」を教えるのは親であるべきです。しかし、とにかく誰もが忙しい。結局、先生たちが「代理親」として、四十人の子供たちを導くために孤軍奮闘ということになります。

さてそれでは、国語の先生たちは、子供たちに「生き方」をどう教えていくのが一番いいのでしょうか？僕は、次の三つのエリアで力を入れていけば、将来子供たちが様々な困難を回避できるようになるのではないかと考えます。

1 デイベートを取り入れる

子供たちには、物事について、感情ではなく論理ではっきりと話を教えるべきです。海外ではよく、日本人は感情的ではないような言い方をされますが、僕はそれは大きな誤解だと思います。

まず、日本人は非常にエモーショナルです。ただ、それを表現することが少ないだけです。この感情的であるという特徴は、そのコントロールの仕方を知らないでいると、時には大きな問題に繋がることもあります。普段はおとなしい子が、突然感情を爆発させて暴力的になるといふ話を時々聞きますが、それも一つの例といえるでしょう。

チームがそれぞれ同じトピックについてリサーチし、その論点について様々な良い点、悪い点を書き出していきます。そしてクラスの前でデイベートを展開します。ルールはシンプルですが堅固なものです。デイベートは常に適切で丁寧な言葉遣いで行わなければなりません。それぞれの発言にはタイムリミットがあります。相手を侮辱するようなコメントは絶対に許されません。最も説得力のある論理を展開したチームが勝者となります。

次に私は、授業で頻繁にデイベートを取り入れるべきだと思います。デイベートでは、二つの

最初は簡単なテーマを選ぶのがいいでしょう。例えば、犬を飼うメリット、デメリットと猫を飼うメリット、デメリットといったテーマです。まず、クラスの中で、誰が犬が好きか、猫が好きかを聞いておきます。そしてわざと、犬派の子は猫の支持を、猫派の子は犬の支持をするデイベートをさせるのです。そうすれば、感情ではなく論理でデイベートを展開することが必要となるからです。

このしりあうことなくデイベートができるようになれば、次に、もっと論争の起きそうなトピック、例えば原子力エネルギー問題や男女平等問題、死刑問題、君が代問題など、難しいトピックへと移っていくことができます。

スポーツが得意な子もいれば、音楽が得意な子、英語や数学が得意な子など、様々です。その多様性が私たち人間を「一人の人格」として作り上げていることを伝えます。「違い」はあざける対象ではなく、「尊敬する」対象であることを教えます。

2 差別を議論する

子供たちには「差別」というものが「悪」であることをはっきりと話していかなくてはなりません。「差別」や「偏見」は、理屈に合わない（つまり、完全に感情に支配された）侮蔑・相手の身体的な特徴、社会的地位、宗教、国籍、性別、政治的信条などに対する侮蔑です。「差別」は、相手を傷つけるということ以外、全く目的を有しないからこそ「邪悪」なのです。

子供たちは、その「差別」のほとんどを親から学びます。親の何気ない話を聞くうちに、自然に子供たちに浸透してしまふのです。もちろん子供たちは、その「差別感」を意識してはいません。だからこそ、誰かが言葉にしてはつきりと示してやらなければならぬのです。気づくことが、その「差別」を捨てる第一歩になるのです。

3 中毒への警告をする

「差別」は論理で撃退することができます。多くの人が、芸能人というものに偏見を持っています。一度も会ったことがなくてもです。面白いですよね。どうして人は、一度も会ったことがない人や集団に対して「偏見」を持つことができるのでしょうか。「差別」が論理に合わないことはつきり示せば、自ずとその「差別」は消えていくものです。

人間の生活には多くの「中毒」が隠れています。日本で一番多いのは、酒、タバコ、ポルノ漫画、セックス、ドラッグ、パチンコ、ギャンブル、そして金でしょうか。

そうです。お金も「中毒」の一種です。二九%もの高利ですら金を借りる人がいる。これは「金」が怖い「中毒」になりうる証拠です。

子供たちが持つかもしれない「差別」を芽生えさせないためには、すべての人間には「長所」「短所」があるということ、はつきり教えていく必要があります。そしてそれが自然なこと、当たり前のことなんだということを教えます。

現在、日本の学校では、こういった様々な「中毒」に対する教育が全くと言っていいほど行われていません。家庭でも然りです。先に挙げたようなものに「中毒」になることが、どれだけ健康面、経済面に恐ろしい影響を与えるものか、子供たちは全く知らされていないのです。彼らが高校



ダニエル・カール
1960年、アメリカ・カリフォルニア州生まれ。1981年、英語指導主事助手として山形県に赴任し、3年間英語教育に従事。そのとき鍛えた山形弁と旺盛な好奇心で、芸能活動をはじめ、講演、執筆活動など何でもこなすマルチタレントとして活躍中。著書に『ダニエル・カールの国際交流入門』（ぎょうせい）『超簡単トラベル英会話』（マガジンハウス）『オラが心の日本アメリカ』（NHK出版）ほか。

を卒業するころには、世間に溢れるそういった誘惑に全く無防備と言わざるを得ません。待ち構える「魔の手」から逃れる術を持っていないのです。

教師として、子供たちに「生きる術」を教えたと思うなら、事実をしつかりと伝え、どうしたらそういう危険を回避できるのか、「方法」を明確に教えていくことが何よりも大切でしょう。